

草庵仏教

第181号
(発行日)
2005年7月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX
(0798) 63-4488
(発行人) 土井紀明
メール: kousien2720@yahoo.co.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日および12日
午後3時より。
○ 真宗共学会 --- 毎月第1と
第3木曜日の午後7時より。
* 8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

真宗問答 ⑫ 称名の本願

Y 「浄土の教えは（本願を信じ念仏申さば仏になる）という教えであり、そして仏になるとは私たちの無明煩惱の罪が一切消滅して、無量の智慧と慈悲の徳を具えることだとお聞きしています」

D 「ええ。無量寿経には、久遠の阿弥陀仏は、法蔵菩薩となつて一切の衆生を仏陀たらしめた」と願われ、長い間思索してその道を見つけ、その願いを実現するために長い間ご修行下さつて、願い通りの力を成就された」と説かれています」

Y 「すべての生きとし生けるものを仏陀たらしめたいという願いは驚くべき広大な願いですが、それをどのように実現しようとしたのでしょうか」

D 「人が仏になるには仏になるための修行（仏因）を行つて、仏因を成就することによつて仏陀になります。ところが修行を成就して仏になるのは特別に勝れた人に限られ、その他の人たちは途上で終わるか、それとも初めからあきらめてしまつて、生死を流転するばかりであるというのが現実の有様です。そん

な凡夫の姿を悲痛したまい、こうした仏因などとても修するのできない、また修しようとしてもしない凡夫を大悲されたのが阿弥陀仏なのです」

D 「私などは仏道修行を本気でしたいとも、せねばならないとも真剣に思つてないような者です。しかし、私はこのまま死んでいき、死んでいく先も分からず、しかも毎日虚しい思いで生きていく自分にやりきれない、何とか本当の人生にならないのか。心の底からの充実が欲しいという飢えをつねに感じていますが、どうにもならないです。すると空しく月日が流れてしまつていきます。実に情けないです」

Y 「仏になろうともしないほどの愚かな凡夫を救うて仏にしてやりたい、永遠の真実の充足を与えたいとおぼしめし立つてくださったのが阿弥陀仏です。私たちに仏に成るような因はないばかりか、知らず知らず地獄に墮ちる因（タネ）を日夜に造っている、そういう私たちが仏にならめたいと願われて、久遠の阿弥陀仏は法蔵菩薩として世に出現し、私たち一人一人に

代わつて私たちの仏因を成就せんがためにご修行して下さいとお聞きしています」

Y 「ということは、法蔵菩薩は私たちに代わつて仏因を仕上げた下されたのですか」

D 「そうなんです。そして法蔵菩薩は修行によつて仕上げた仏因を南無阿弥陀仏として私たちに与えようとされています」

Y 「そうすると南無阿弥陀仏は私たちが仏になることのできる因なのですね」

D 「そうですね。ですから私たちが南無阿弥陀仏をいだけば、私たちが仏因をいただいたことになるのです。この仏因は、やがて悪業の我が身を終える（死）のを縁として、仏因は開いて仏果となる、すなわち浄土に生まれて仏に成るといわれています」

Y 「では私たちは南無阿弥陀仏をいただきさえすればいいのですか」

D 「そうですね。そうなんです、私たちが邪見・憍慢・疑惑の煩惱が強く容易にいだかかないのです」

Y 「では名号をいただくにはどうすればいいのですか」

D 「この南無阿弥陀仏の名号が一体誰のための名号であり、何のための名号であるのかという名号のいわれをよく聞くことです」

Y 「南無阿弥陀仏の名号にはど

ういう意味があるかということ聞くのです」

D 「名号のいわれとは名号に掛けられている阿弥陀仏の本願のことです。ですから名号のいわれを聞くとは阿弥陀の本願をよく聞くことです」

Y 「聞けばどうなるのですか」

D 「聞けば本願の大悲のまことが私に届いて、名号を信じる信心になつてくださいます。それがそのまま名号をいただいたことになるのです」

Y 「本願のお心が私に至つて信心となるのですか。信心は名号を受け入れる心ですから、信心をいただくことが名号をいただくことになるのです」

D 「そうですね。称えられているお念仏が、こんな私を救わずにはおかないという阿弥陀仏の広大な大悲そのものであると知らされます。それは大悲の願心が私に至り届き、私の信心になつてくださるのです。ですから信心をいただく内実は、称えられている南無阿弥陀仏の名号を（私をたすけたもう南無阿弥陀仏様）といただいていることなのです」

Y 「では阿弥陀仏の本願の大悲とはどのようなものなのでしょうか」

D 「それを端的に表されたのが阿弥陀仏の第十八願で、無量寿経に釈尊がお説きになつています。そのなかに乃至十念若生者不取正覚――すなわち十念に

至るまでもし生まれずば、正覚を取らじーとあります。ここに弥陀の広大な大悲心が端的に表されています。」

Y「その心は」

D「それは、たとえ十声なりとも念仏申すものを、もし浄土に生まれさせないようなら、私自身仏（正覚）には成らないという法蔵菩薩様のお誓いです。ご自身の正覚を掛けものにして衆生を救おうとの大悲の誓いなのです」

Y「乃至十念いわば念仏称えるばかりで浄土に生まれしめる、その外に何もいらぬという誓いなのですね」

D「ええそうです。称えるばかりで助けるとこの誓いは、私どもの悪業煩惱の罪を知り給い、（汝の罪業深重の罪はいかほど深くとも私が代わって修行し、かならず汝の罪をすべて浄化して仏にするから、そのままなりで私に任せよ」という如来法蔵様のおぼしめしです」

Y「私どもをまるまる助けたもう大悲のお心が第十八願のお誓いなのですね」

D「そうなんです。まことに乃至十念（我が名を称えよ）のみ心は、罪業深重にして浮かぶ瀬もない私どものところにまできて、私の下に手を差し込んで抱き取り、受け取りたもう大慈大悲の極まりです」

Y「なぜただ（称えるばかりで）

とまでいわねば阿弥陀仏の絶対の大悲が表せないのですか」

D「これについて法然聖人は『選択集』の本願章に次のように述べておられます。大事な箇所なので長い文ですが引用します。

（しかればすなわち一切衆生をして平等に往生せしめんがために、難を捨て易を取りて、本願となしたまへるか。もしそれ

造像起塔をもつて本願となさば、貧窮困乏の類はさだめて往生の望みを絶たん。しかも富貴のものは少なく、貧賤のものはなはだ多し。もし智慧高才をもつて本願となさば、愚鈍下智のものはさだめて往生の望みを絶たん。しかも智慧のものは少なく、愚痴のものはなはだ多し。もし多聞多見をもつて本願となさば、少聞少見の輩はさだめて往生の望みを絶たん。しかも多聞のものは少なく、少聞のものはなはだ多し。もし持戒持律をもつて本願となさば、破戒無戒の人はさだめて往生の望みを絶たん。しかも持戒のものは少なく、破戒のものはなはだ多し。

自余の諸行これに准じて知るべし。まさに知るべし、上の諸行等をもつて本願となさば、往生を得るものは少なく、往生せざるものは多からん。しかればすなはち弥陀如来、法蔵比丘の昔

平等の慈悲に催されて、あまねく一切を摂せんがために、造像起塔等の諸行をもつて往生の本願となしたまはず。ただ称名念

仏の一行をもつてその本願なし

たまへり）

と仰せられています」

Y「この選択集のお心をわかりやすくお話し下さい」

D「阿弥陀仏のお誓いがもし多くの寄進をする者を救うという本願なら貧しい者は救われぬ。しかるに富める人は少なく貧しい人は多い。もし、頭が良く才能があるような者を救うという本願なら、愚かな者は救われぬ。しかるに賢い者は少なく愚かな者は多い。あるいは知識教養のあるものを救うという本願なら、教養のない者は救われぬ。また戒律を保ち自分の行動を厳しくコントロールできるような人を救うという本願なら、戒律も保てずだらしない者は救われぬ。このように何か人間に殊勝な行いをなすのを条件に救う本願なら、それから漏れてしまふ者は多い。それなら一切衆生を救うことはできない。それゆえ弥陀は一切の衆生をもれなく救うために、人間に勝れた行いを起こすことなどは一切要せず、私どもの生まれつきのまま、今のこの姿のままなりで救おうと誓われたのです。それで（ただ口に称えるばかりで引き受ける、助けるぞ）という本願を建てられたのです」

Y「私たちの行いの善し悪しを問いたまわないのですね。では私たちの心にたいしてはどうな

のでしょいか」

D「同じです。（我が名を称えよ）のお誓いは、私たちに他者を愛する心や浄らかな心を起こす者を助けるといふ本願ではありません。私たちは人を愛するどころか人憎んだりねたんだりあるいはむさぼったりして、煩惱を起こして止まず、またそれをおさえることもままならぬ人間です。そういう私を根底から洞察して、煩惱はいかほど起こそうとも、それは問わず、（そんなお前だから、その汝を受けとる故、その心のまま念仏してこい）と仰せられるのです」

Y「仏教のお話を聞くと、よく自己の自覚とか、いのちの尊さの自覚といわれますが、本願には（目覚めよ）とも（自覚せよ）とも仰せられず、（ただ称えるばかりで）と仰せ下さいますか」

D「私たちにもし（事実にならずき、目覚めよ）とか（自己を自覚せよ）という阿弥陀様のお誓いなら、自己を自覚したり、生きていく尊い事実が気がつきたり出来る人は助かるでしょうが、そういう人はわずかです。そんな殊勝なことのできない、ただいつまでもボンヤリとした心でしかない私どもは救われません。そんな私どもを知り給い、哀れみたまうて、（汝、無自覚なる愚かな者よ、そんなお前だから私が汝をまるまる引き受ける）との願心であります。それが（我

が名を称えよ）なのであります」

Y「でも私は本願がいつまでも信じられませんが、本願をたのめませんが、どうしましょう」

D「それは本願のお心の聞きよが足りないのです。実は弥陀の本願は、そんな疑いだらけの、疑うより知らぬ、それゆえ永遠の暗黒に自らを引き入れることしか知らぬいたずら者に目をかけたまい、そんな私に（汝の心の奥の奥まで私は知り抜いている。汝の心はどうあろうともそれを邪魔にはしない。そのままなりで助ける）とまで仰せくださる本願なのであります」

Y「もう私たちは阿弥陀仏から逃げることも出来ず、どこどこまでも追いかけて（助けずにはおかぬ）という大悲が私たちにかけられているのですね」

D「この本願を念仏往生の願と申し、この願の大悲が届いて、南無阿弥陀仏はこんな私のためにございましたかと、南無阿弥陀仏が真にいただかれるのです。聖人は信心について

信樂を獲得することは、如来選択の願心より発起すと仰せられ、名号をいただく信心は阿弥陀如来様が念仏を選んで、念仏で救おうとされた大悲の願心から起こるのです。ですからよくよく念仏往生の願心

聞くことが大切なのです」（了）

歎異抄

後序第一講

右条々はみなもって信心のことなるよりおこりそうろうか。故聖人の御ものごたりに、法然聖人の御とき、御弟子のかずおおかりけるなかに、おなじく御信心のひと、すくなくおわしはるなり、

(歎異抄後序より)

現代語訳(これまで述べてきた誤った考へは、どれもみな真実の信心と異なっていることから生じたものかと思われます。今は亡き親鸞聖人からこのようなお話をうかがったことがあります。法然聖人がおいでになったころ、そのお弟子は大勢おいでになりましたが、法然聖人と同じく真実の信心をいだかれていた方は少ししかおられなかったでしょう)

*

これまでは、亡き親鸞聖人から唯円様がお聞きしたお言葉十章、それと聖人のお説きになった真宗信心と異なった主張が八章取り上げられて批判されました。ここからは第十九章ともいわれることがありますが、一般に歎異抄の後序といわれる結論の部分です。

いろいろな異義が出てくるのは、要するに親鸞聖人の信心とは異なっているから、そこから異義が起こってくるのだと先ずいわれています、そして、こうした異義が起こるのは唯円様のいた頃ばかりか、聖人がおられた頃もそうであったことを述べておられます。聖人のおられた頃の異義について、聖人ご自身が「法然聖人がおられた頃、法然聖人のお弟子は沢山おられたが、法然聖人と同じ信心の

人は少なかつた」と仰せられたとのことです。

このように唯円様が聖人からお聞きになられた「法然聖人の教えを聞きながら、聖人と同じ信心の人は少ない」といわれることに關して親鸞聖人はお手紙に

「法然聖人の御弟子のなかに、われはゆゆしき学生など、おもいたるひとびとも、この世にはみなように法門もいいかえて、身もまどい、ひとをまどわして、わづらひおつてそうらなり」とか

「浄土宗の義、みなかわりておわしましおつてそうらひとびとも、ただ聖人の御弟子にてそうらえども、ようように、義をもいいかえなんどして、身もまどい、ひとをまどわしおつてそうらゆめり。京にも、おおくまどいおつてそうらゆめり」と仰せられ、このことを大変悲しんでおられます。あの偉大な法然聖人のお弟子でありながら、法然聖人の教えられた浄土宗の教えをまっすぐに受け取らず、自分の勝手な了解でもって教義を言いかえ、しかもそれが法然聖人の仰せの如くに自分自らがそう思いこんで、自分だけでなく、集まってくる他の人たちまでまどわしている、まことに「あさましきことにてそうらなり」と親鸞聖人は悲痛されておられます。

*

法然聖人の法語に
「上人常の言ことばに云わく。我は烏帽子えぼしもきぬ法然房なり。黒白も知らざる童子の如く、是非知らず無智の者なり。ただ念佛往生を仰いで信ず。釈迦は念仏して往生せよと勧め、弥陀は念佛せよ、来迎せんと、仰せられたり。この一事を信じて

余の事を知らず」とあり、この歎異抄にも、

「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよきひと(法然)の仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり」とあり

とあります。これらは法然聖人の信心が、選択本願である念仏往生の願を信じて念仏申すばかりにて浄土に生まれるという信心であり、教えの要旨は「本願を信じ念仏もうさば仏になる」(歎異抄第1、2章)教えであります。

法然聖人はご自身を愚かな無知の身と知って、ただ念仏往生の誓いを単純に信じ念仏申すばかりでしたし、親鸞聖人も愚かなる身として「ただ念仏して弥陀に助けられなさい」という法然聖人の仰せに信順していかれたのであります。法然聖人は弥陀の本願の前には、白と黒さえ判別できないような幼い童子の如き無智の者として、ただ念仏往生を仰いで信ずるとまでおっしゃっておられます。

それは、両聖人とも自身の智慧のありだけを尽くして、自分の智慧は生死を超えるにはまったく役に立たないことを身にしてみて感じられ、いずれの行も及びがたき、いずれの道も絶え果てた我が身と知り、そんな者に「汝を助けるのはこの弥陀であるぞ、ただ念仏するばかりでよい」という大悲の誓いに、自身の行いも心も理屈も思案も学問も教養も一切のみにせず、ただ単純に弥陀をたのみ、ただ単純に誓いを信じ、ただ単純に念仏されたのであります。

*

ところが私たちは、自分の智慧がまだ間に合うように思い、我が知性をたのんで本願の不思議を素直に受け入れず、自

分の智慧に納得できるようにひん曲げて解釈してしまうのです。「ようように、義をもいいかえなんどして」してしまうのです。

こうして本願のお心から離れ、その信心というものも本願のお心のまます直に受け取る信心ではなくなってしまうのです。それは「われはゆゆしき学生など、おもいたるひとびと」と聖人が申されているごとく、法然聖人のお弟子の知識人に多く見られる姿だったのであります。

弥陀の本願は人間的知性で裁くものではありません。本願はまことに佛智より現れた不可思議な本願であります。にもかかわらず、私たちは自らの思議でもって弥陀の本願を知性的にのみ了解し、自分の分かる枠組みの中に無理に押し込めてしまい、自分の考へに合うたものを正当な浄土の教えであると、自分も人もそう思いこんでしまつて、自他を惑わせてしまふのです。

こうして法然・親鸞聖人の流れである念仏往生の信心の流れは混乱し、それによつて「身もまどい、ひとをまどわしおつてそうらゆめり。あさましきことにてそうらなり。京にも、おおくまどいおつてそうらゆめり」というような状況が生まれたのであります。このことは現代もまったく同じであります。

*

私たちは自らの知性を基にして、弥陀の本願を合理化して納得しようとする計らいを放棄し、弥陀の本願が自らの身心にストレートに響きわたるまで、弥陀の本願に心を開きながら(待つ)ことが大事なのではないでしょうか。(了)